Vol. 3

プライドを捨てる―

捨てる練習

文 弘兼憲史
text by Kenshi Hirokane

学校を卒業して働き始めたばかりの頃は、大なり小なり、誰もが夢や志を抱いていたと思います。

右も左もわからない。経験も実績も何もないにもかかわらず、「俺ならできる」「絶対やれる」という、向こう見ずで〝根拠のない自信〟を持っていた人も少なくないでしょう。

まさに〝若さの特権〟。

ぼくはそんな若者を嫌いではないし、社会に出たばかりの若者は、そんな青臭さをある程度は持っているべきだと思っています。

ですが、世間知らず、怖いもの知らずだからこそ持っていたそんな自信は、いつまでも持ち続けられるものでもありません。社会経験を積めば積むほど、世間はそんなに甘くない、簡単なものじゃない、ということがわかってくるからです。

夢や志だけでは、仕事はできません。

カッコ良さ、スマートさにいくらこだわろうとしても、時には泥臭く、不器用に、ひたむきに取り組まなければならないこともある。

プライドや正義感が、通じないこともあります。いやむしろ、通じないことのほうが多い。それが、仕事という現実なのです。

「俺ならできる」と自信を持っていた仕事に手を付けてみたら、「こんなに難しかったのか……」と気づくこともあるでしょう。

「絶対やりたくない」と思っていたことを、やらなければならない局面に遭遇することもあるかもしれません。

具体的な例を出します。

入社5年目のAさん。取引先との間にトラブルが起こりました。検証してみると、Aさん側に非はなく、原因のほぼすべては先方にあることが判明します。それでも、上司はAさんに、「まずは謝ってくれ」と言ったのです。

このとき、あなたがAさんなら、どうしますか?

「非がないのだから、謝らない」というプライドや、「先方が悪いのだから、あっちが謝るべきでしょう」という正義感を振りかざすでしょうか。

たしかに、Aさんに非はないのですが、「私は間違っていません」と開き直ってみたところで、何の足しにもなりません。

それどころか、取引先とのビジネスは、そこでストップするでしょう。上司の言うように、まずは謝って、仕事を先に進めたほうが生産的なのです。

Aさんのほうから謝れば、相手も非を認めるかもしれません。言葉には出さずとも、結果的に貸しを作ることになるかもしれません。

上司はそういったことも含めて、Aさんに謝ってくれと言ったのです。

正義を貫く勇気がないわけでも、卑屈になっているわけでもありません。ましてやその上司が、「俺も一緒に謝りに行く」と言うような、思いやりのある人なら、なおさらです。

そして実は、5年の社会経験を積んでいるAさんだって、上司の言葉の真意を理解していたはず。

それなのに、素直に謝ろうとしなかったのは、プライド、正義感、信条、意地、流儀……といった、自分の「芯」にかかわらない〝必要のないもの〟にとらわれていたからです。

そんなものは、きっぱり捨ててしまいましょう。

捨てる練習
プレジデント社
708円(税込)

Profile

1947年、山口県生まれ。早稲田大学法学部卒業。松下電器産業(現パナソニック)に勤務後、74年に『風薫る』で漫画家デビュー。『島耕作』シリーズや『ハロー張りネズミ』『加治隆介の議』など数々の話題作を世に出す。『人間交差点』で小学館漫画賞(84年)、『課長島耕作』で講談社漫画賞(91年)、講談社漫画賞特別賞(2019年)、『黄昏流星群』で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞(00年)、日本漫画家協会賞大賞(03年)を受賞。07年には紫綬褒章を受章。人生や生き方に関するエッセイも多く手がけ、『弘兼流60歳からの手ぶら人生』(海竜社)、『弘兼流やめる!生き方』(青春新書インテリジェンス)などの著書がある。